工事の現場より

今はこんな様子だよ。

解体こぼれ話②

耐震補強工事のため、室内では解体作業が進められています。臨春閣の華やかな室内が一変、どの建物の内部だろう？　と一瞬戸惑ってしまう光景です。しかし解体作業は発見の連続！建築時や移築時・修理時の記録、詳しい構造や構法など、バラバラにしていくことで初めてわかることがいっぱい！　解体現場ならではのお楽しみ、ご紹介します。

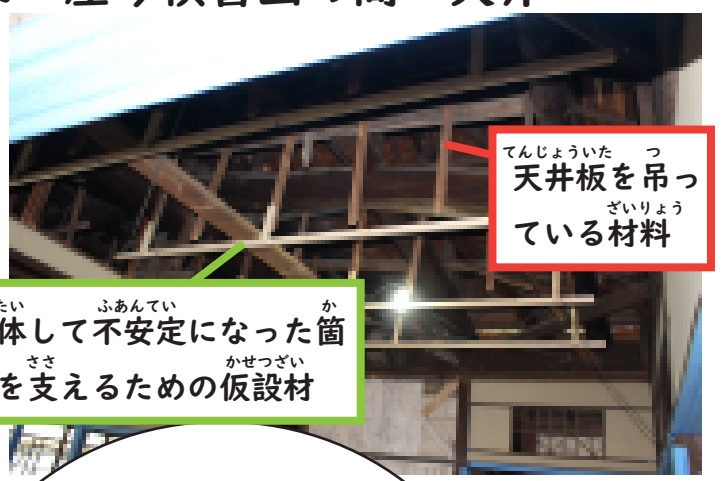
第三屋次の間ー天井～２階へ登る階段

◀竿縁天井を解体、さらに物入れの鴨居・敷居、上部の壁も解体しました。階段の裏側が露わになり、見えないところだからこそ残された痕跡が確認できます。この階段自体もさらに解体します。

第三屋天楽の間ー床板

▲黙々と床板を止める釘を外す大工さん。床板を取り去ると、床下に古材が収納されているのが発見されました。蟻害など傷みがひどいもので、おそらく戦後修理時に新しいものに取り替えて床下に保管したと推定されます。傷みがひどくとも大切に保管されていたので、創建当初の材料の可能性があります。

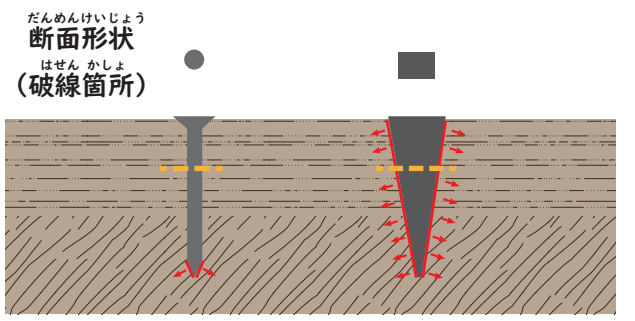
第二屋琴棋書画の間ー天井



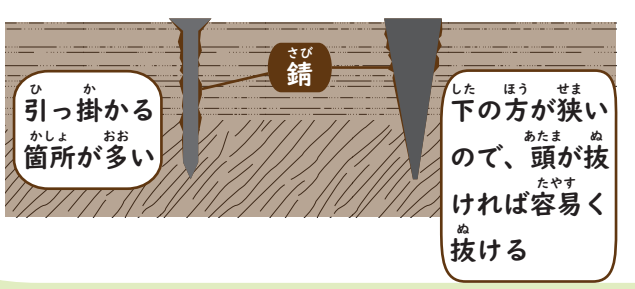
天井って、実はこんな風に華奢な材料で吊ってあるだけなので、重いものは支えられない。天井に忍び込んだ忍者は、体重がとーっても軽かった、のかな？

解体小話ー和釘と洋釘

日本の伝統的な釘「和釘」と、明治時代以降西洋から伝わった「洋釘」。現在の建築現場では、機械生産で効率よく作れる「洋釘」の方が一般的ですが、「和釘」は文化財修理の現場等には欠かせないため、一つ一つ手作りで手間がかかりますが生産は続けられています。最大の違いは断面形状、その違いは解体の時にも大きな影響を生じます。



洋釘は先端だけが尖っているので、木材に食い込む力が弱く、抜けやすい。それに対し、和釘はくさび状に食い込むので抜けにくい。



文化財修理の現場では錆びた釘を抜くことが多い。洋釘は寸胴型で引っ掛かりが多く、錆が途中に発生しやすいので抜けにくい。和釘は先細りなので、頭が抜ければ多少錆びていても容易く抜ける。